

特別優秀賞

心のままに

熊本県 真和中学校 一年
清永 皐樹

ジャラッ。あ、転がる!

僕はとっさの動きで、散らばる小銭を追いかけた。夕方の電車は混雑していて、人の足のすき間をはうようにして動くのがやっただ。数枚拾って見渡すと、ほこりのたまった溝の部分にも、50円玉と10円玉が入り込んでいた。それも拾って汚れを払い、落とさないよう握りしめた。

落とし主はわかっている。人をよけながらたどり着き、僕は小銭を差し出した。「どうぞ」とか、「全部じゃないかもしれないけど」とか、そんな言葉を使うつもりでいた。でも実際には、「これ」と言うのがやっただだった。相手がとても不機嫌な顔をしていたからだ。拾ったらいけなかったのかな。僕は困惑した。

その女子高生が派手に小銭をまき散らしたとき、なぜか僕以外に拾った人はいなかった。僕は中学生になって電車通学を始めたばかり、もしや暗黙のルールでもあったのだろうか。女子高生は僕から小銭を荒っぽく受け取ると、パッと顔を背けて去って行った。

迷惑だったのかな。電車を降りてからも考え続けた。心の温度がスッと下がっていくような、変な感じがした。

これまで僕は、人が困っていたら助けるのがあたりまえだと思っていた。でも、人によっては、それをいやだと思うのかもしれない。そんな人は案外多くいるのかもしれない。親切をためらう気持ちが僕の中に生まれていた。

それから少し後、カフェ併設のパン屋でのことだ。僕と父が店内に入ろうとすると、高齢の女性が買い物を終えて熱々のコーヒーを片手に、もう片方の手でシルバーカーを押して外に出ようとするところだった。

見た瞬間、ヒヤリとした。あの不安定さではコーヒーをこぼすか、下手したら女性がシルバーカーごとひっくり返るのではと思ったからだ。

「手伝いましょうか。」

いつもならすぐ出る言葉だった。でも、喉がぐっと詰まった。女子高生のにらむような顔が浮かび、足がすくむ。どうしよう。迷っている間にも、女性はシルバーカーを揺らして進もうとしている。焦っていると、横にいた父が「持ちましょうか。」と声をかけた。

女性からコーヒーを受け取り、出口部分の段差でシルバーカーを支え、近くの席に女性を座らせる父。戻ってくる父の向こう側では、もう女性がコーヒーを飲み始めていた。コロナ禍で、一時期は制限されていた店外のカフェ。女性がゆったりとくつろいで幸せそうにしているのを見ていたら、僕の胸には後悔がわき上がった。

迷うことなんかなかった。人が人に親切にしていけないことなんか、あるはずがなかった。自分が親切心からそうしたいと思ったのなら、行動していいはずだ。拒まれたらまた、そのとき考えればいい。

そして、ふと思った。あの女子高生は怒っていたのではなく、注目されて恥ずかしかったのかもしれない。いや、もはや真相はわからない。でも何であれ、僕はこれから心のままに前向きに、人への親切をためらわず生きようと思った。